

スタートカリキュラムって何だろう？

小学校入学後の生活

— 学校に求められていること —

茨城女子短期大学
保育科 助川 公継

1. 小学校学習指導要領解説 総則編 から

第3章 教育課程の編成及び実施

第2節 教育課程の編成 — 4 学校段階等間の接続 —

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

特に、小学校入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを児童や学校、地域の実情を踏まえて編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められる。

幼児期

- ・好奇心にあふれていて、主体的で新しいことを学びたくてしかたがない。
- ・伸び伸びとした環境で自己肯定感が育まれる。
- ・学ぶことと遊ぶことの区別がなく、楽しく遊ぶなかで学んでいく。
- ・幼児期から小学校にかけては、「できること」よりも「やりたいこと」を！
- ・まわりの関係やルールがわかってきて、自分が動いて何かに働きかけることで、様々な状況が変化していくことが実感できる。
- ・5歳児は、これまでの経験を生かしながら新たな課題を発見したり、新しい方法を考えたり、試したりする時期。

小学校1年生

- ・学校生活の入門期…多様な体験を通して、学校生活に適応していく時期。
- ・自分の好きなことや得意なことが分かってくる時期。

2. 架け橋期のカリキュラムのイメージ(6つの視点から考える)

6つの視点	5歳児	小学校1年生
	4月 …… 10月 …… 3月	4月 …… 9月 …… 1月 …… 3月
① 期待する子供像	どのような子供を育てたいのか	
② 遊びや学びのプロセス	主体的・対話的で深い学び	
	体験を通じた気づき	自覚的な学び → 将来の探究へ
③ 園で展開される活動/ 小学校の生活科を中心とした各教科の単元構成等	活動の主体は幼児であり、先生は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していく	【スタートカリキュラムの考え方】 ・成長の姿 ・発達の特徴 ・生活科(合科的・関連的) ・学習環境
④ 指導上の配慮	先生の関わり	・安心・安全な環境(子供目線、自己発揮できるような多様な環境) ・気づきを基に考えることを促す ・気づきの質の高まり(伝える、交流する、振り返る等)
	環境の構成・環境づくり	
	・対話を通して考えを促す(疑問やヒント) ・意欲を引き上げつつ、任せる ・善悪や他者との関係モデル ・先生は、幼児同士の仲立ち	
⑤ 子供の交流	ねらいと振り返り ・ 自発的な関わり	
	小学校への期待・憧れ	自信をもって自分を発揮
⑥ 家庭や地域との連携	地域や保護者のニーズ、地域の強みや課題	

※ 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)
(文科省から)

3. 小学校教育(目標=到達目標)の特徴 (生活科を例に)

◇ 育てたい資質・能力《コンピテンシー》と評価規準作成

- ↓
- 【知識及び技能】…「知識」→「〇〇に気付いている」、「〇〇が分かっている」
「技能」→「△△の学習活動において、〇〇している」
 - 【思考力、判断力、表現力等】…「〇〇しながら、△△している」
…見付けて、比べて、たとえて、試して、見通して、工夫しながら
 - 【**学びに向かう力**、人間性等】…主体的に学習に取り組む態度、感性、思いやりなど

◇ カリキュラム《教科等を中心に構成》

- ↓
- ・学問の体系を重視 視点→「自分と人や社会との関わり」、「自分と自然との関わり」、「自分自身」
 - ・学校と生活、家庭と生活、地域と生活、公共物や公共施設の利用、季節の変化と生活、自然や物を使った遊び、動植物の飼育・栽培、生活や出来事の交流、自分の成長の9項目

◇ 教育方法《主体的・対話的で深い学び》

- ↓
- ・生活科で大切にしていることとして、体験や個性を重視する教育への積極的な対応と、学校と家庭や地域との連携を大切にする

◇ 学習評価

- ・ペーパーテストに加え、論述やレポート、発表、グループでの話し合い、作品の制作等の多様な活動

5

4. 「茨城県保幼小接続カリキュラム」から (H30 茨城県教育委員会)

※ 小学校入学期から、1学期の終わりにかけて3つの視点から考える

「学びに向かう力」という視点からみた、目指す子どもの姿

小学校入学期～1学期の終わりの姿	
学びに向かう力	主体的に学ぶ力
	人と関わりながら学ぶ力
	数量、図形、文字への関心
	小学校での過ごし方(生活のリズムや場所など)に慣れ、楽しく学校生活を送ろうとする。 学習や生活の中の様々な課題の解決に向けて主体的に取り組もうとする。 幼児期の教育を通して育まれた力を生かして、いろいろな方法で自分らしく表現しようとする 学校の動植物や身近な自然に触れ、その美しさ・不思議さ・四季の移り変わり等から感じたことや気付いたことを表現しようとする。(国語・生活) 本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読んだり、読み聞かせを聞いたりする。 いろいろな運動や新しい体の動きに興味をもち、楽しんで挑戦しようとする。(体育)
	絵や図、言葉や文で、自分の思いや考えを表現し、互いの考えを聞き合いながら学習や活動を進めようとする。 相手のことを想像したり、伝えたいことや伝え方を選んだりする。 新しい友達と進んで関わり、互いのよさを生かしながら学習に取り組もうとしている。 友達と話し合いながら自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりしようとする。
	鉛筆の持ち方に気を付け、丁寧に自分の名前やひらがなを書く。(国語) 言葉のまとまりを意識してひらがなを読んだり、書いたりしようとする。(国語) いろいろな観点をもとになかま集めをする。(算数) 10までの数を数えたり数字を読んだり、順番や物の位置を数で表したりする。(算数)

6

「生活上の自立」という視点からみた、目指す子どもの姿

小学校入学期～1学期の終わりの姿		
生活上の自立	規則正しい生活	■「早寝・早起き・朝ごはん」の生活リズムを身に付ける。
		■一日の流れや時間を意識し、見通しをもって生活しようとする。
		場にに合わせて身支度をしようとする。(給食着や雨具の後始末をする等)
		食事の大切さを学び、給食の配膳や後片付けができ、給食を楽しむ。
	健康で安全な生活	学習用具の準備や後片付けなど、自分のことが自分でできるようになる。
		休み時間には屋外で遊ぶなど、丈夫な体をつくり、病気の予防に努めるようになる。
		いろいろな食べ物や栄養に関心をもち、好き嫌いをなく食べようとする。
		施設や公共の場所のルールやマナーを守るようになる。
	人との関わり	危険を予測して、自分や友達の身を守ろうとする。
集団の一員として、適切に行動しようとする。		
気持ちのよいあいさつや返事、相手を考えた言葉遣いを心がける。		
話を落ち着いて最後まで聞くようになる。		
		自分の物だけでなく友達の物も大事にする。

「心の成長」という視点からみた、目指す子どもの姿

小学校入学期～1学期の終わりの姿		
心の成長	自身の心の成長	新しい学習や活動に、意欲的に取り組もうとする。
		■自分なりの目標をもって進んで挑戦しようとする。
		思うようにいなくても、くじけずに取り組もうとする。
	人との関わりを通した心の成長	学校の約束やきまりを知り、よいことと悪いことを考えながら行動しようとする。
		友達と一緒に活動する中で、お互いを理解し、仲良く助け合おうとする。
		トラブルになったときに、自分たちで解決しようとする。
		自分のことを大切にし、相手のことも大切にしようとする。
		新しい友達や先生、上級生や地域の人々など、様々な人と触れ合うことを楽しみにする。
		学校生活を支えている人に関心をもって関わり、感謝の気持ちをもつ。
	様々な経験に基づく心の成長	新しい友達と仲良く助け合おうとする。
		■動植物の世話等の体験活動を通して、命を大切にする心をもつようになる。
		いろいろな友達と協力して活動する楽しさを味わう。
		幼児期の教育を通して身に付けたことを生かしながら学習や生活をしようとする。

〈活用の仕方〉 ○ それぞれの項目について、実態を踏まえチェックし傾向を分析し、今後に生かす。

【参考】 エンゲストロームの学習理論 (活動理論)

ユーリア・エンゲストローム(1948～、フィンランド)

◆ 子ども主体の活動の4つの段階

① 「やりたい」の段階 (欲求の芽生え)

- ・あこがれ ・(本物に出会い)自分もやってみたい ・真剣さに触れる ・感動する
- ・自分の足で「本物の活動」に出会い、真似しようとする

② 「やりたいけど、できない」「できないけど、やりたい」の段階

- ・自発性が支え ・「やりたい」が根にあるので、試行錯誤しながら徐々に
- ・必死に工夫する ・「できるかもしれない!？」

③ 「やった! できた!」の段階

- ・さらに磨きをかけ、次の段階へ

④ 「いつでもできる、どこでもできる」の段階

- ・「あー、おもしろかった」「なーんだ」「そーなんだ」 → 子どもの納得、満足感、充実感
- ・その子にとって充実度は異なる。指導者は、あまり高望みをしない

※【参考】 汐見稔幸、久保健太:「保育のグランドデザインを描く」、ミネルバ書房

9

《まとめ》

○ 接続が円滑でないと、小学校での教育的な効果が十分に望めない。

- ・幼児期は、伸び伸びとした環境で自己肯定感を育むことをめざす
→ 小学校入学後の慣れない環境やルールにより、できたことも難しくなってしまう傾向
- ・子どもには、「自ら学ぶ力」がある
(幼児期の遊びは、主体性や伝え合う力、社会性、協同性、集中力の発揮に結びついている)

○ 適切なカリキュラム・マネジメント(入学当初のカリキュラムが機能するように)

- ・生活科は、主体性を大切にする教科 → 内容や方法において幼児期からの学びを生かしやすい
- ・接続カリキュラムは、幼児教育施設と小学校が目的を共有しなければ動かない
<接続のテーマやねらい、課題を考える>→合意形成→連携→接続へ
- ・保幼小での「教育観」や「子ども観」を共有、できれば一致させる
→ どのような気持ちで取り組むかを共有 → 子どもの交流以上に、先生同士の交流を!
- ・アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの整合性はどうか。互いに連携協力を!

○ 学力向上のポイントは非認知能力に関係している？

- ・小学校低学年の学力差は、「**学びに向かう力**」に関係していると言われている。
ほとんどが、「大切な先生の話聞き逃していた」「授業に集中できない」、「最後までがんばれない」が原因
- ・幼児期からの育ちをうまく生かした取り組みを!